

寄せ場／東アジア／被抑圧人民のシュタイ

—日雇全協結成前夜の山岡強一—

Yoseba, East Asia, and Oppressed *shutai* (subject) :

Examining Texts of Kyoichi Yamaoka on the Eve of Establishing The National Council of Workers' Unions of Japan

友常 勉

This paper aims to deal with documents written by Kyoichi Yamaoka (1940-1986), one of the leading activists in *Yoseba* (street day laborer market) in the 1980s, in which Yamaoka focused on the policies regarding day laborers' movement and class struggles, and the formation of subjectivity in *Yoseba* around 1980-81. In *Yoseba* labor movement, day laborers were defined as *Ryudo-teki Kaso-roudosha* (unstable underclass laborers) in the texts of Shuji Funamoto (1945-1975), a representative activist in *Yoseba* class struggle and the revolutionary movement of the 1970s. The labor formation of day laborers' market in *Yoseba* has been characterized as a racialized structure based on the historical trajectory of the construction industry in Japan, especially the multilayered subcontracting system of the labor market determined by Japan's imperialism, colonialism in the pre-and during war time, and the postcolonial situation after the Asia-Pacific war. The conventional discourse of the revolutionary movement in *Yoseba* emphasized that the liberation for the day laborers would be realized only through the solidarity between formerly colonized ethnic minorities such as Koreans, Okinawans, indigenous Ainu and Buraku, and the Japanese as former colonizers. In terms of the subjectivity of day laborers, although the discourse was clear for activists of the 1970s such as Funamoto, the occurrence of a change in *Yoseba* in the late 1970s and the early 1980 became obvious. After the end of economic growth in the mid-1970s, the population of day laborers in *Yoseba* hollowed out and were instead peripheralized and dotted as temporary workers those who did not necessarily concentrate in *Yoseba*. It meant that the place where the possibility of a revolutionary movement, shouldered by formerly colonized or stigmatized victims, dissolved. It is the change that Yamaoka had to struggle with and faced the theoretical and practical question of how to organize identity of subjectivity of *Yoseba* day laborers under the situation of hollowing-out of the place. This paper demonstrates Yamaoka's struggles to organize the *Yoseba* labor and the revolutionary movement in crisis by referring to the epistemological and theoretical apparatus of Naoki Sakai of *shutai*, and tries to articulate the political conditions on the eve of establishing The National Council of Workers' Unions of Japan as a breakthrough moment in the *Yoseba* movement in the early 1980s.

171

【キーワード】 寄せ場、山谷、山岡強一、船本洲治、山村建設会社労働争議、済州4・3事件
Yoseba, Sanya, Kyoichi Yamaoka, Shuji Funamoto,
Labor dispute with Yamamura Construction Company, Jeju Uprising in April 3rd

はじめに

本稿は、寄せ場の労働運動のリーダーであった山岡強一の1980-81年のテキストを中心に、寄せ場に

における流動的下層労働者の労働運動と階級闘争の方針およびその主体をめぐる山岡強一の省察を取り扱う。1980年代の寄せ場の言説とはいえ、本稿が検討する山岡のテキストは、1970年代の寄せ場の活動家であった船本洲治のテキストの読み込みを通して書かれており、その意味で1970年代の寄せ場の言説も同時に扱うことになる。当然ながら活動家たちのテキストは、彼ら・彼女らが活動する政治闘争・労働運動の場の語彙に規定されている。それゆえまずこれらのテキストを構成している言説の歴史的なシンギュラリティを示しておく必要がある。

まず留意する必要があるのは、寄せ場の日雇労働者—船本らはそれを「流動的下層労働者」と定義した—の階級闘争の発展のために、山岡は〈東アジア〉および東アジアの〈被抑圧人民〉という枠組みを常に参照していることである(友常、2019: 46-60)。建設下請け労働に従事する下層労働市場の日雇労働者＝流動的下層労働者は、下請け業者や手配師・建設資本による日常的な搾取と支配に対抗して、労働争議に訴え、あるいは時に暴動に参加する。マルクス主義的な政治闘争の枠組みにもとづいて、彼ら・彼女らには、その政治経済的な支配から自らが解放されるために、プロレタリア階級としての普遍的な認識と立場を獲得することが期待されるが、その際に必要とされる政治的経済的な図式 *scheme* が、ここでは〈東アジア〉であった。1980年代までは少なくともリアリティのあったこの〈東アジア〉という図式は、戦後および冷戦期を通じて、アメリカによる政治的軍事的支配が及んだ太平洋地域までを考慮すれば、時代的制約を帯びた図式である(Shigematsu・Kamacho 2010)。ただし日米安保体制のもとの当該地域の軍事化、さらに天皇・天皇制を旗印とした戦前日本帝国主義の「大東亜共栄圏」の範囲で植民地化された歴史的経験と、その戦後責任を告発する政治的意味もまたここには含意されていた。それゆえ本稿でもこうした歴史的制約を帯びた〈東アジア〉という枠組みを、山岡のテキストの用法にしたがって参照する。

172

ただし、〈東アジア〉という枠組みには、1980年代に比して、ポスト植民地主義状況という観点から、今日では新たな政治的課題が問われるようになったことも指摘しておきたい。それは図式としての東アジアとでもいうべき視角である。

27万人の島民のうち約3万人が虐殺された1948年の済州島4・3事件において、南朝鮮労働党の指導のもと、ハルラ山にたてこもってゲリラ闘争をつづけた「武装隊」は、今日でも追悼の対象になっておらず、依然として正当な扱いが宙づりにされたままである(文京洙、2018)。これにかかわって、2019年12月19日・20日に東京外国語大学で開催されたワークショップで、金東炫は、「犠牲者の選別」をめぐるこの争点を含めて、4・3事件の解明のためには、「地域の言葉によって、地域の歴史を語る」ことが必要だと語った¹。継続する植民地主義とその抑圧を意味するポスト植民地主義状況を乗り越え、歴史的経験を明るみに出すためには何よりも地域の言語で語ることが必要だということである。ポスト植民地主義的状况において、当該地域の人々にとっての解放とは何か、それはどのように可能かという課題に照らして、金東炫の提起はもっとも困難であり、それゆえすぐれて実践的である。具体的には、南朝鮮労働党の蜂起を、済州島民の大衆運動とその気運と不可分なものとして理解すること、それによって済州島蜂起を豊隈01(パルゲンイ、アカという意味)の陰謀論だとする、ひとつの通説を覆すこと、それは南朝鮮労働党の批判と評価も伴うこと、そして無垢の犠牲者も「武装隊」も等しく歴史の主体として位置づけること——そのためには、当事者たちや事件の遺族たちの記憶をたたき起こすことが必須である。

しかも、この提起と、済州島をめぐる現在の政治的状況が交差している。済州島は軍港・軍用空港と

¹ 東京外国語大学国際日本研究センター主催「済州島4・3事件と沖縄をつなぐ」国際ワークショップ&講演会(2019年12月19日・20日)における金東炫(済州大)の発言にもとづく。

して活用されようとしており、海洋帝国をめざす現代の韓国資本主義国家との闘いの最前線でもある。濟州島は日本帝国主義統治時代に要塞化され、4・3事件の戦場となり軍事的虐殺を経験し、今また再び軍事化されようとしている。濟州島は軍事的要衝でありつづけている。実際、1968年には、アメリカの極東戦略にもとづいて、沖縄の米軍基地の濟州島移転が取りざたされることがあった(村上 1968、久住 1968)。こうした濟州島の来歴と現在が、沈黙を強いられてきた住民たちを覆っている。この重層的に更新される軍事化が、沈黙に沈黙を重ねることにつながっているのである。したがって金東炫らの闘いは、沈黙の歴史を打開する解放の主体を形成することを目的とする。

軍事化されるアジア太平洋地域において、当該地域の軍事化・ポスト植民地主義化が国際労働移動をうながし、それが各国における移民労働の労務管理体制—日本における入管体制の改悪など—につながっている。そして下層労働社会を中心とした労働再編は常に人種主義的である——レイシズムと民族差別のコードを伴っている。今日においては、濟州島、韓国、そして沖縄におけるポスト植民地主義との闘いと批判的研究は、他のアジア太平洋地域と接続している。したがって〈東アジア〉の地政学は常に相対化されている。だが、連帯も批判的研究も、図式主義的な枠組みから出発するわけではない。それは、経験主義的で遂行的な取り組みの積み重ねからしか始まらない。〈東アジア〉の図式を共有することに意味があるのはそのためであり、そしてここに金東炫の提起の意義がある。金東炫の提起が、暗黙裡に、大所高所からの政治の図式主義の拒否から出発していることに、注意を促しておきたい。カントにしたがっていえば、私たちの認識は地政学的な時間と空間の図式に規定されているが、それは図式主義的な枠組みとは根本的に異なる。実践的な連帯は、経験主義的かつ遂行的にしか形成できないのである。こうした政治の認識論においては、異なるレジームあるいは体制(apparatuses)を越境／共役する翻訳の実践のポリティクスが必要であることを指摘するにとどめたい(Sakai 2018、Solomon 2019)。

金東炫の提起には、もう一つの重要な争点があることを指摘しておこう。サンドロ・メッザードラの〈逃走の権利〉や今日の移民研究における「移動論的転回」は、主体の過渡的・越境的性格に存在論的な意義—移民の存在論—を見出している(Mezzadra 2006、Mezzadra/Neilson 2013、伊豫谷 2019)。この移民の存在論は、従来の意味での当事者性の付与から自由である。というよりも、当事者性はあくまで選択的かつ遂行的に獲得されるものとして、批判的に再定義される。この点に照らして、山岡の階級闘争論では、寄せ場の主体—酒井直樹にしたがって、本稿ではシュタイ—主体という二つの位相を区別するが—は、選択的かつ遂行的に〈主体〉となる(酒井、2002: 101-105)。下層労働者であること、あるいは濟州島住民であることは、図式においてシュタイとして規定される。だが、それはまだ地政学のおよび歴史的言説のレジームが生み出す〈主体〉ではない。そして〈主体〉生成の条件に、実践の経験に対する批判的省察の関与が求められるのである。本稿が対象とする山岡のテキストは、シュタイと主体とのあいだの内的な攻防と批判的省察の記録でもある。

1980年代を前にして、山岡強一に求められていたのは、第一に、寄せ場の暴動に促されて形成される活動家と、その活動家が暴動と日雇い労働者の日常のなかに合流していくような組織論であった。そして第二に、寄せ場の労働者たちの主体をたちあげるための、疎外された経験をつなぐ図式であった。しかし、山岡の眼前にあったのは、70年代とは異なる現実に直面していた80年代の寄せ場の変化であった。日本の寄せ場は、冷戦構造がもたらした「平和」あるいは「ブルジョア市民主義」的現実のなかで変貌していた。その寄せ場を、冷戦下でポスト植民地状況にある東アジア地域—とりわけ沖縄・韓国・朝鮮—に接続する必要があった。しかもそれらの接続や連帯という課題を、山岡は、あくまで闘争の現場の言葉で表現しなければならなかった。例えば80年5月光州蜂起は山岡にとっては決定的な政治的

経験であったが、それは植民地主義の遺産に規定された下層労働者群が、エスニック・マイノリティを抱え込んでいたからであり、さらにこの人種的編成は、当面の敵である下層下請け業者たちやヤクザたちにも該当していたからである。そこで、ポスト植民地主義のもとで切断されている東アジアの経験を接続できる主体をつくり出すために、山岡は寄せ場の労働者の経験に即して言語化し、ただちに運動の組織化のための実践方針に仕上げなければならなかった。そのようにして、山岡はシュタイが〈主体〉へと形成されることを期待したのである。

1 「建党・建軍」あるいは「階級」の形成

山岡強一の寄せ場の運動に対するもっとも重要な理論的貢献は、船本洲治とその焼身決起(1975年6月25日、沖縄嘉手納基地前第2ゲート前)を思想的な原点として、磯江洋一のマンモス交番警官殺殺(1979年6月9日、山谷地区派出所)、そして60年代からの寄せ場暴動を、ひとつながりの下層労働者解放運動論として表現した点にある。

船本は、60年安保闘争以来の山谷暴動と寄せ場の運動を三つに時代区分していた。第一期は大衆の暴動という自然発生性に対する活動家の意識の立ち遅れ、第二期は活動家による改良主義、第三期は山谷暴動の対行政圧力闘争へのすり替え、である。以上の整理を踏まえて、船本が下した総括を引用しながら、山岡はその読み直しを求める。

船本は、「意識分子の大衆運動が大衆暴動と合体しさらに大衆暴動が都市人民戦争として拡大・深化する建党・建軍の運動」(…)として前進させられねばならないと提起した。この彼の提起は、下層主義だとして批判されてきた。しかし、我々は彼の総括と提起を次の点において見直すべきではないか。(山岡、1996(執筆は1985、表記は以下同):38-39)

船本のテキストに対して、山岡が強調するのは次の三点である。まず、大衆の自然発生性と意識性との関係を、緊張をもって把握している点。次に、山谷一釜ヶ崎暴動の時期区分の方法である。船本は敗戦からではなく、60年を敗戦期から戦後期への転換点として位置づけ、そこに暴動の激発期があったことに注目し、今日まで続く差別と抑圧が構造化されたのだと考える。そして第三に、革命闘争の中に自らを位置づけようとする志向である。第三の視点、すなわちテキストの書き手である船本が自らを寄せ場の革命運動の主体の一人として位置付けているこの視点を、山岡は階級論として言い換えている。「階級とは自らの根拠の対象化のもとに、他の階層の利害との緊張関係のなかに獲得される全体である」(同上:39)。船本、そして山岡の主張を読み込んでみれば、こういうことになる。すなわち、「意識分子」活動家は、寄せ場の大衆＝日雇い労働者と同様に革命運動の主体としての「階級」である。ただし「階級」となるということは、自らの立場を、他の(寄せ場の)階級の利害との緊張関係のなかで獲得する「全体」になるということである。すべての被抑圧階級の利害を代表する全的類的解放の主体として、プロレタリアートを位置づけた初期マルクスや、毛沢東主義的な語彙によって語られたこの言葉は、実際のところは、寄せ場の暴動や悪徳手配師や人夫出し業者、下請け業者との現場闘争、労働争議のなかで、自らを「前衛」とするのではなく、寄せ場大衆の一部として位置づけ、大衆の中に融合していった、しかしまた常に異なる利害のなかにあって異和を抱えている「意識分子」としての自分たち活動家集団を、「階級」として語っていることがわかる。この「階級」は遂行的かつ選択的に選び取られた立場である。

そこからすなわち、「建党建軍」という毛沢東主義的あるいは新左翼的な語彙も、寄せ場の現場闘争の文脈で読み替える必要があることがわかる。「建党建軍」運動においては、前衛が大衆を領導するというイメージではなく、活動家集団が遂行的に暴動する寄せ場大衆の一部となり、同時に、日常的にも、非日常においても、自然発生性と意識性を身に付け、身体的理論的に武装した大衆が生み出されることを期待しているのである。以下にみるように、山岡のこの立論には多くの内省が踏まえられている。山岡が、船本を手元に置いてたどり着いたその思想を読み解いてみよう。

階級利害の異和について、1981年3月に書かれた獄中書簡のなかで、山岡は寄せ場に行き着いた自らの立場を次のような仕方では表現している(山岡、1981(1996):190-191)。マルクス『資本論』における、相対的過剰人口が、資本の蓄積に対応する、貧困の蓄積を必ず生む、という記述を参照しながら、「貧しさ」の意味内容を検討している。

例えば〈貧しさ〉〈無知〉という点を見ると、今の寄せ場の日雇は相対的に貧しくもなければ、無知でもありません。私は磯江氏や南氏や私自身が、何故居るのだろうか、よく考えます。俺たちは、正に貧しくもなければ、無知でもない(…)。とすると、俺たちは下層ではないのだろうか？(…)。ところで、磯江氏や南氏のような階層下降したものが、今日の寄せ場には非常に多いのではないかと思う。この場合の階層下降は没落といったようなものとしてではなく、極く自然に「自由」な労働力として下降させられているということだと思ふのです。これは下層の拡大を意味するのではないか。この階層下降に際して、労働力商品としての「自由」の幻想が、戦後民主主義の個人主義と一体となって果たした役割は測り知れないのではなからうか。(同上)

資本蓄積は剰余労働の搾取を意味し、蓄積された剰余による資本展開は、他方で、相対的過剰人口としての失業者予備軍を創り出す。それは社会の貧困化を拡大していく。しかし、マルクスは、その貧困を当事者がそれとして認識しているかどうかを語ってはいない。山岡が目にしたのはその点である。すなわち、今日の貧困化あるいは下層化とは、そのようなものとして意識されずに進展している。その経験は、したがって、ポスト植民地状況の労働者やアンダークラスとは異なる。後者はエンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』に比較することができる。しかし、先進資本主義国、たとえば日本ではそうではない。「今日、この産業資本主義段階の悲惨さに比べられるのは、韓国など被植民地の労働者においてであろうと考える」(同上)。そして、自らの「貧しさ」の内実を次のように語る。「私は、我々にとって下層、貧しいと言う時の基準は、市民社会というモデルにあって、それからの欠落、欠損を多くの場合言うのではないか」「俺たちを下層として特徴付ける貧しさとは、関係の貧しさのことであり、それは市民的レベル・モデルからの欠落・欠損感の裏返しのコンプレックスのことだ」(同上)。

山岡がいう「関係」とは、自らの「貧しさ」の経験としての「下層の系譜」を歴史化できず、皮相にとらえるしかできないありようのことである。「下層の系譜」は、「擬制民主主義」のもとで、あつげなくも解消され忘却されてしまう(同上)。だが、「階層下降」は主観的には自由意志にもとづいた過程だが、しかしまた「下層は社会経済的に生み出され、政治的に支配されている」(同上)。とはいえ、だれもが「貧しさ」の社会経済的構造に一足飛びに到達できるわけではない。

(…)その階級支配によって隠蔽された下層の系譜＝根拠を、自分らの手に取り戻すことによって欠落や欠損を補う関係ではなく、被支配・抑圧の共同性に根ざした関係を創り出していくことが

出来るのではないか、そのためには俺たち自身の貧しさの本質、実態を、まずしっかりと把握、認識する必要がある(…)。(山岡、同上、192)

下層労働者の「貧しさ」を深化させた船本は、盟友であり、1972年に相次いで結成された釜共闘（暴力手配師追放釜ヶ崎共闘会議）と現闘委（悪質業者追放・現場闘争委員会）をともに担った鈴木国男（デカパン）—1976年2月16日に大阪拘置所保護房で体温を下げる注射によって虐殺された一との関係を問い、共通の言葉を見出す作業を続けていた（友常、2019：46 - 60）。山岡が評価するのは、そうした船本の寄せ場での人間関係のつくり方である。アル中患者が多い寄せ場労働者は常に精神「障害」者差別や保安処分攻撃にさらされているが、それは「S 闘争支援共闘」としても闘争方針化されていた。それは船本が実践した「関係」のつくり方に起因するものだ。それゆえ船本にならって、「関係」を深化させることで、その存在の根拠と来歴を失った下層労働者に、主体の根拠を設定することができるはずだと。その意味で、山岡によれば、1979年6月9日に山谷“マンモス交番”の巡査部長を刺殺した磯江洋一も、満たされぬ飢えと渇きの中をさまよい、「関係」を求めていた一人だと理解される（山岡、同上：191）。磯江洋一の単身決起は、その意味で孤立させられた単独者としての寄せ場労働者を、集団で迎えることができなかつたことに起因すると、批判的に総括される。

本稿の関心からいえば、ここで即時的に「貧しさ」のなかでさまよっているのは、シュタイの位相にある個人である。だがシュタイは、制度化された言説やテキスト化された発話に一義的に規定されない位相にある。その意味で〈自由〉である（酒井、前掲）。しかし、階層下降の経験や、現実の政治社会的な関係性は、彼・彼女に下層労働者としてのアイデンティティを要求する。そこで制度的言説によって要請されるのは、彼・彼女に受け身的でトラウマ化されスティグマ化されたアイデンティティである。山岡がいう「関係の深化」とは、このトラウマ化・スティグマ化されたアイデンティティの転回の動作を意味している。それによって、下層労働者が、単独者としての立場から脱出することを期待したのである。

2 「被植民地人民との闘いの水路構築」

先に引用した獄中書簡に続いて、やはり1981年3月に山岡は、1979年6月9日の磯江洋一の警官刺殺 - 「マンモスポリ殲滅」から1980年10月2日までの闘いを、次のように自己批判的に振り返っている。

手探りであったけど、72-74年総括、F6・25-6・9を「流動的下層労働者と被植民地人民との闘いの水路構築」というスローガンに結実させたことは、すばらしい成果であると確信している。問題はこのスローガンに煮詰められた思想は路線であり、その路線を運動化し、その運動論を活動方針へと実践化する努力を怠り、混乱していたことにあったと考えます。（山岡、同上：196）

山岡は、これらのスローガンが空文化していたこと、さらに「人民戦争」という言葉を多用したことを自己批判している。それらのスローガンが、寄せ場の労働者の日常闘争のなかで具体化されているとはいえなかつたからである。だが、この自己批判は何によって導かれたのだろうか。

先の引用でいう「10・2」とは、人夫出し業者である山村組が経営する「半タコ暴力飯場」（戦前のタコ部屋ほどではないが、用心棒＝「棒心」による暴力支配が行われる飯場）に対する団体交渉と示談が、「恐喝」「脅迫」へと変えられ、他のメンバーとともに山岡が逮捕された事件を意味する（その後山岡は起訴され、1981年7月に保釈を勝ち取るまで長期拘留に付された）。

山村組とは、山村組・山村建設として、山村グループの一つであったが、山村組と山村建設は名目的に建設業を事業内容とするも、実際におこなっていたのは労働者供給事業であった。労働者供給事業のためには建設業の認可が必要であるが、山村組は親会社としての山三建設の名義を利用することで、当局からの追求を免れていた。したがって山村組の労働者供給事業（人夫出し業）は違法であり、さらにはそれに従事する手配師たちも資格を有していなかった。手配師たちは日常的に労働者に対する暴力事件や強盗事件を繰り返し、さらに地元のヤクザに所場代を支払うなど、従来からヤクザと癒着していた。山谷ではこの時点で、山谷統一労働組合、山谷日雇労働組合、そして山岡らの「6・9闘争の会」の三者共闘が成立していたが、飯場での暴力と強奪を受けた労働者の訴えにより、この三者によって、山村組に対する団交が開始されたのである（「山村組闘争公判調書・刑事訴訟記録」、山谷労働者福祉会館所蔵）。なおすでにこれに先立って、三者共闘は前田建設・最上鉄筋闘争に取り組んでいた。

建設産業における下層労働市場の労務支配は、戦前日本帝国主義による朝鮮人労働者の強制連行や労務管理という側面と、労務支配の前面に立つのがヤクザであり、そこに旧植民地出身者である在日朝鮮・韓国人も含まれるという、ポスト植民地状況を反映した下層社会の重層的差別構造の側面とがある。72年 - 74年の現闘委による新井技建闘争はその典型であった。そして山村組闘争もそうした差別構造を抱え込んでいた。その意味で、寄せ場労働運動・解放運動における「被植民地人民との闘いの水路構築」というスローガンには、こうした下層労働市場の歴史性を背負いながら、寄せ場の労働争議における眼前の〈敵〉との回路形成が必要となるという、切迫した課題が含意されていたのである。そしてまた山岡は（あるいは船本も）、そうした下請け業者や暴力手配師との争議や暴動に際して、必ず長大な日本帝国主義の植民地主義と下層労働市場の形成史—そこでは常に近世の囚人労働から戦前の「タコ部屋」史、戦後の手配師制度、80年代の労働者派遣事業までも加えられる—を振り返らなければならなかった。

これらの事情が、山岡の自己批判の背景を形成している。ただし、この自己批判の内容を理解するために、ここでもうひとつのテキストを置いてみたい。1980年6月25日に、「6・9の会」を主催者として、船本洲治焼身決起5周年を期した集会が開催されている。集会に際して山岡は基調文を起草している（山岡、1995（1980）：29 - 33）。「世界反革命勢力の後方を世界革命戦争の前線へ転化せよ」と名付けられたこの基調文のタイトルは、船本が1975年6月25日に焼身自殺したその時に「イショではない」として書かれた遺言状のタイトルをそのまま用いている（友常、2019：84-101）。基調文は「南朝鮮革命闘争の前進」「沖縄解放 - 反天皇・反基地・反CTS」「船本洲治同志と下層プロレタリアート」の3章構成になっている。これは現闘委の活動を総括し、「6・9闘争」を路線に位置付け、80年代の寄せ場の運動方針を確立する必要があった山岡にとって、ひとつの思想的な決算である。先の引用でいわれている、「72-74年総括、F6・25-6・9を『流動的下層労働者と被植民地人民との闘いの水路構築』というスローガンに結実させたことは、すばらしい成果である」というのは、この集会をひとつの達成点として考えられている。しかし、現闘委以来の活動家メンバーであったNが、この基調に対して次のような

深刻な疑問を呈していた(「N氏書簡」1980年6月30日付)²。山岡の自己批判を理解するために置いてみたいテキストは、このNの書簡である。

N書簡の趣旨は次のようなものであった。そもそも主催が公然団体である「6・9の会」である以上は、公然登場する大衆的な結集のための方針提示となるはずであろう。しかしそうっていない。Nが疑問視したのは特に次の三点である。「プロレタリア国際主義と人民武装」「沖縄人の反大和-反天皇の革命的側面に学び、それを抵抗の源泉として展開される反軍事基地・反CTS基地の闘いに合流しなければならない」「今こそ地上-地下を貫く総力戦体制として獲得しなければならない」。まず、国家権力に手の内をさらしながら、「地上-地下を貫く総力戦体制」のような非合法闘争を提起していることである。それにもかかわらず、具体的な行動としては、沖縄現地闘争を方針提起しているが、それはいったいいかなる内容で沖縄人民と合流するつもりなのか³。さらに基調は、闘争主体についての表記の混乱が存在した。すなわち、「プロレタリア人民」「日本人民」「労務者」「下層プロレタリア」といった表記の並列である。さらに重要なのは基調文の次の論理展開であった。

75年〈海洋博粉碎、皇太子上陸阻止〉闘争における、二つの決起——6・25 嘉手納第二ゲート前での船本洲治同志の焼身決起と7・17〈姫百合・白金決死隊〉(沖縄青年と大和青年との共同)の決起、そして広範な沖縄人民の闘争、その内在的運動性を捉え返すことは、非常に重要な今日的課題であると考え。我々は、何よりもまず、沖縄人の反大和-反天皇の革命的側面に学び、それを抵抗の源基として展開されている反軍事基地・反CTS基地の闘いに合流しなければならない。
(…)

5年前の75年6月25日、船本同志の焼身決起のもう一つの背景としてあったものは、72-74年と激烈に展開された釜ヶ崎-山谷の叛乱闘争であり、日帝本国内において展開されつつあった本格的な都市ゲリラ戦としての東アジア反日武装戦線の闘争であった。(山岡、前掲：31-32)

この山岡の基調文に対して、Nの書簡はこう断ずる。「(…)山谷-釜の叛乱と東アの背景として船本の焼身決起があったのでは断じてない。彼は山谷-釜の叛乱と東アのたたかいを一身に統合して、それらのたたかいの継続として決起したのではなかったか。これに因って、流動的下層労働者と『沖縄』の内通性を欠落させているように見える」(「N氏書簡」)。Nの批判がいうように、基調では、船本洲治の決起やひめゆりの塔での皇太子(当時)に対する火炎瓶投擲などと広範な沖縄人民の闘争の「内在的運動性」を述べ、そのあとで「もう一つの背景として」と断ってから、寄せ場叛乱、東アジア反日武装戦線のゲリラ闘争と並列している。これによって、船本の闘争を、沖縄と寄せ場に分裂させてしまっている。しかし、船本は焼身決起によってこれらの課題を同時に体現し、そのことを「イショ」において明記していたのであり、運動のサイクルのひとつを確実に進めたのであって、いまさら読み解かれるような問題提起だったのではない。だからNは、山岡の基調文は寄せ場と沖縄の「内通性」を欠落させている、と批判したのである。すなわちこの基調文において、山岡に欠けていたのは、運動過程の内在的な当事者＝実践者として自らをそこに位置付ける視点であり、立場であり、常にそのように自己を位置付ける緊張感であった。他方で、「地上-地下を貫く総力戦体制」のように、自らの主体の立場を深化させること

² 以下、とくにことわりがないかぎり、同書簡からの引用。

³ 当時の住民闘争・生存闘争としての反CTS金武湾闘争については、上原こずえ『共同の力——1970-80年代の金武湾闘争とその生存思想』(世織書房、2019年)を参照。

なく、華々しいスローガンだけが付け加えられている。その観念性と、まるで運動過程を他人ごとのように記述し、自らを指導部として距離を置く、前衛主義的な態度がここにはあると、Nは暗に指摘しているのである。いわば、シュタイから政治的主体とのあいだの乖離を無視し、前衛党 - 大衆のモデルにしたがった上からの情勢分析と方針提起に対する批判であった。それは、現闘委に参加していた経験からいっても、船本の組織論になじまない内容であったといえよう。

先に検討したように、山岡は1981年の獄中書簡のなかの「関係」をめぐる思索で、自らの「貧しさ」の経験を通して、「下層の系譜」を歴史化できず、皮相にとらえるしかできないありようについて自問自答していた。ただしそれを性急に政治化して飛躍させることも留保していた。ここで考えてみたいのは、80年6・25集会の基調文執筆から、10月2日の逮捕、そして翌年7月までの長期拘留のなかで、山岡は1980年6月30日付のN書簡による批判を受け止め、その自己批判を深化させていったのではないかということである。そのような含意で、1981年3月の山岡の書簡に書かれた言葉「問題はこのスローガンに煮詰められた思想は路線であり、その路線を運動化し、その運動論を活動方針へと実践化する努力を怠り、混乱していたことにあったと考えます」という自己批判を理解してはどうだろうか。すなわち、活動方針へと実践化する努力や経験のないままに、路線だけが基調文で踊ってしまったということの反省である。

次の山岡の獄中からの書簡（1981年3月15日付）も、そうした内省を示すものとして読むことができるのではないだろうか。それは「労働者の武器は団結であり、組織である」という主張である。

(…)「やられたら、やり返せ」について(…)。まずこれは「殺られたら殺り返せ」ではなく、やはり「やられたら、やり返せ」であるし、オトシマエをつけることの正当性です。(…)労働者が日常語として〈やられたから、やり返すんだ〉と発するのに対して、〈やり返す〉のは良くないとは、いくら左翼語をもってしても言わないでしょう。結局そこで出る話は、団結すること、即ちあなた一人の問題ではない、悪い奴の正体は本当はこうなんだ、だから一人で救われるのではなく、団結してみんなでやっつけようではないか(…)。(山岡、1996(1981)：208-206)

「団結」を強調することの根拠には、船本洲治も磯江洋一も単独者として決起したのであり、その孤立を解決できなかった運動の弱点を、運動方針へと転化しようとする意志がある。さらに続けて山岡は書いている。「労働者にとっての闘いは、“団結して組織的に反撃する”歴史よりも、“一人でオトシマエをつける”歴史のほうが長く深いのです」(同上：209)。山岡が果たそうとしたのは、「一人でオトシマエをつける」という単独者の歴史を逆転することにあつたのである。

おわりにかえて

最後に二つのことを指摘しておきたい。

まず、山岡が80-81年の自己批判-内省の過程で得たのは、活動方針を立てるということが同時にすでに主体的な実践でもあるということと、それが内在的に自己の主体的根拠を深化し、他者を仲間として再組織化する作業であるということである。しかもそれらの作業は自らを事態の主体として遂行する緊張感を必要とする。繰り返すが、シュタイから主体になるこの転回が遂行的であるからこそ、逆に、支配的で制度的な言説と対峙する緊張感が必要なのである。純粋な意味での下層労働者が存在するかど

うかという問いに意味はないが、遂行的に形成される主体は、本質主義的な意味での当事者＝スティグマ化された犠牲者たちとの緊張関係から自由ではない。山岡の階級論はその意味でさまざまな制度的言説との対峙を必要とした。

とはいえその対峙もまた、経験主義的に、そして遂行的に進められなければならない。寄せ場は多様なエスニック・マイノリティや下層労働者が吹き寄せられる場であり、シュタイから主体への生成は、あくまでのその場における「出会い」によって決定される。山岡は、主体形成の条件と考えたこの場が有する特異性について、次のように述べている。

我々自身の解放という問題と国際主義ということ、あるいはプロレタリア国際主義と我々の任務ということに関して、私は下層労働者が、何故在日朝鮮人、ウチナンチューやシマンチューと同居して存在させられているのか、という現実へ常に迫れない運動論は一国主義に墮すと考えている。(…)大切なことは、寄せ場日雇労働者として、アンコとして、現に如何なる闘いをしていのか、ということであって、それなくして、その闘いを推し進めることでの“出会い”なくして、“出会い”はないと、話し合っている(…)。(山岡、同上：210)。

このことは、本稿冒頭に述べた図式としての東アジアという視角にかかわっている。東アジアの人民との〈出会い〉という課題もまた、ローカルな関係において、経験主義的に共通の言語を探ることによってすすめられなければならないのである。このことは、80年-81年の自己批判と内省の深化を経て、山岡の思想においてどのように表現されることになったか。そのきわめて具体的な身振りを、殺された佐藤満男監督から受け継いで、山岡が完成させた映画『山谷 やられたらやりかえせ』(1985年)に求めてみよう。映画の最後のパート「筑豊・古河鉱業大峰鉱のボタ山」から、豊州炭鉱、朝鮮人鉱夫の寮跡、そして大峰鉱・日向峠脇の「朝鮮人の墓」を想起しよう。「われらの故郷は慶尚北道なのに 私はどうして石炭掘りにきたのか／日本がいいとだれが言ったのか 日本にきてみればひもじくてたまらない」という朝鮮民謡「노래카라(ノレカラ)」をバックに流して写されるその映像言語は、1980年4・25集会の基調文にみられる、政治的なスローガンの接ぎ木的な構成とは、大きく隔たっている(「山谷」制作上映委員会、1986：84-85)。いみじくも山岡は映画の最後の編集作業のさなかに、「N氏へ」の手紙を書き送っている(1985年11月22日付)。山岡は書いている。

追い込みに入っています。この9日に東京分の最終撮影を終え、30時間分のフィルムを5時間にひろう作業と、音の拾い出し、合わせをやっています。作業が進むにつれて、それらしい姿を表してきます。これは楽しいことです。同時に作品の成否を決定する段階にきているという緊張感も生まれてきます。こういう時、Nさんと酒でも呑みながら話せたら、としみじみ思います。今、頭を悩ましているのは、筑豊の終りを朝鮮人墓にして、それから玄界灘へもっていくことまではうまくつながるのですが、その後どんな画をもってきてエンディングへもっていくか、という点です。(…) (同上、1986：5)

映画では、〈出会い〉というローカルな経験を歴史的経験へと深化させ、共通の言葉を探しながらシュタイから主体への転回を遂行していく組織＝主体形成論が、映像イメージという手段によって追求された。船本のテキストを読み込み、現場で格闘してきた山岡の到達点がこの映画であることは疑いない。

もうひとつ指摘したいことは、寄せ場の変化についてである。山岡が自らの「貧しさ」の根拠を遡及するなかで到達していた、ポスト植民地主義状況下の労働者人民たちと日本の寄せ場の変容についていえば、山岡たちはその変容を暴動で実感する機会があった。1982年4月25日の山谷暴動は、1973年以来、9年ぶりの暴動であったが、山谷争議団メンバーが追求していたモガキ(酔った労働者から金品を奪う)の男が、交番に連行されたことが契機となって、午前中から人々が集まり始め、結局1000人以上の参加者が加わった。しかもそのなかには寄せ場労働者だけではなく、多くの近隣の若者たちが参加していた(山谷争議団 1982)。これによって、「今や、古い、“冬の時代”の外套を脱ぎ捨てねばならない」とされたが、それは下層労働市場の主体の変化を先取りしていただろう。その先にあるのは「寄せ場なき寄せ場」であり、社会の「総寄せ場化」とされる、労働者数の過半数を超える非正規労働者の出現であった(西澤 1995)。それは寄せ場の運動に新たな課題を突き付けることになった。

さて、1981年7月の保釈後、山岡らの運動は1982年6月に四大寄せ場(山谷、釜ヶ崎、寿、笹島)の運動体の統合組織である「日雇全協・山谷争議団」の結成に向けて進んでいく。ただし山谷では、そうした下層労働市場の主体の変化と、組織化という課題と並行して、ただちに国粋主義右翼の皇誠会との争闘が始まる。国粋会系右翼と山谷争議団との非妥協的な争闘のなかで、『山谷 やられたらやりかえせ』の監督・佐藤満男が刺殺され、そのあと映画製作を引き継いだ山岡強一もまたヤクザの凶弾に斃れることになる。皇誠会戦のなかの山谷と山岡強一については、稿を改めて検討したい。

友常勉(ともつね つとむ、Tsutomu TOMOTSUNE)

東京外国語大学

References

- 伊豫谷登士翁、テッサ・モーリス＝鈴木、吉原直樹編(2019)『応答する〈移動と場所〉——21世紀の社会を読み解く』ハーベスト社
- 久住忠男(1968)「沖縄基地の済州島移転説——現状では実現は困難」『世界週報』1968年7月30日.
- 酒井直樹(2002)酒井直樹監訳『過去の声 一八世紀日本の言説における言語の地位』以文社.
- 「山谷」制作上映委員会(編集・発行)(1986)「映画『山谷』—やられたらやりかえせ」
- 山谷争議団(1982)「春雷は何を撃ったのか——4・25暴動の意味したもの 5・9〈4・25暴動弾圧粉碎〉総決起集会報告集」
- 友常勉(2019)『夢と爆弾 サバルタンの表現と闘争』航思社
- 船本洲治(2018)『新版 黙って野たれ死ぬな』共和国
- 西澤晃彦(1995)『隠蔽された外部 都市下層のエスノグラフィー』彩流社
- 村上薫(1968)「次の展開——沖縄から済州島へ?——ベトナム戦後の米極東戦略」『朝日ジャーナル』1968年6月2日
- 文京洙(2018)『済州島四・三事件 「島のくに」の死と再生の物語』岩波書店
- 山岡強一(1996)『山谷 やられたらやり返せ』現代企画室
- 山谷労働者福祉会館所蔵資料
- 「山村組闘争公判調書・刑事訴訟記録」
- 「N氏書簡 1980. 6. 30付」

Mezzadra, Sandro (2006) *Diritto de fuga: migrazioni, cittadinanza, globalizzazione, edizione nuova*, Verona: ombre corte. 北川真也訳. 『逃走の権利——移民、シティズンシップ、グローバル化』人文書院、2015年.

Mezzadra, Sandro. Brett, Neilson (2013) *Border as Method, or, the Multiplication of Labor*. Duke University Press Books

Sakai, Naoki (2018) "The Modern Regime of Translation and its Politics." *In A History of Modern Translation Knowledge*, ed. by Lieven D'hulst and Yves Gambier, 61-74. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.

Shigematsu, Setsu. Keith L. Camacho(2010) *Militarized Currents: Toward a Decolonized Future in Asia and the Pacific*. University of Minnesota Press.

Solomon, Jon (2019) 'Discovering the Modern Regime of Translation in China: Liu Cixin's Remembrance of Earth's Past and Wuhe's Remains of Life.' *Journal of Translation Studies* 3(1) (2019, New Series), 139-183.

謝辞 本稿を成稿するにあたって、社会運動論研究会での議論が大変参考になった。とりわけ清家久美、樋口直人、稲葉奈々子、レシュケ綾香の各氏からは有意義なコメントをいただいた。また、上原こずえ氏には済州島と沖縄に関する資料を紹介していただいた。記して謝意を申し上げたい。